

水環境・湖沼(9) (3-B-16-3～3-B-17-1)

今までの湖沼の浄化対策は、主として陸域の負荷削減を行ってきた。点源や面源の単位負荷量又はL・Q式を用いた流入負荷量等を用いてシミュレーションを行い流入負荷削減を行ってきた。底泥については、浚渫、覆砂が主な改善策であった。

今回の当セッションの発表は、底泥からの汚濁物質の溶出メカニズムに着目した発表があった。最初に次のような発表があった。「霞ヶ浦間隙水中の溶存有機物の特性」と題して底泥間隙水中の溶存有機物(DOM)濃度の深さ方向プロファイルが経年的、季節的に著しく変動することなど興味深い発表であった。次に「霞ヶ浦底泥における有機汚濁物質変換プロセスに関する研究」の発表があり、 ^{14}C でラベルした有機物を底泥に添加し、その挙動を明らかにした研究。最後に「底泥好気化の微生物群衆の生息分布に及ぼす影響解析」と題して発表があった。アンモニア酸化細菌の底泥中での分布を、Real Time PCR で解析し、底泥において微生物による窒素循環は、表層数 cm に存在するアンモニア酸化細菌の働きが促進されることなどを明らかにした発表があり、活発な討議がなされた。

今後は、陸域のみならず、底泥における物理化学的及び微生物学的な解明を行い、有機物負荷の削減に向けた研究が多く出ることを期待したい。

(鳥取県衛生環境研究所 南條 吉之)